

銀鈴 ぎんれい

クリスマスの前日、市場は今夜のごちそうの買い出しに来たお客で大にぎわいです。折からの雪花に人々は目を細めて、イヴの雰囲気を楽しんでおりました。陽気なクリスマス音楽が流れて、皆の気分をますます浮かれさせます。お母さんもついで子供たちのおねだりを聞いてやり、男の子はガールフレンドへのプレゼントを思い立ちます。

市場を抜けたところには大きな駅があつて、ここでもクリスマスを故郷で過ごそうという人々でごった返してました。ほら。大きな汽笛を鳴らして、遠い雪国へ向かう列車が発車しようとしています。両わきに荷物を抱えたおばさんが、ばたばたと階段を下りてきて走り始めた列車に飛び乗りました。

「あの汽車はどこまで行くの」

「あれはここよりずっと寒い村に行くのさ」

向かいのホームで南の町へ帰る親子が話しています。

この大きな町からずっと北の方の山奥に小さな村があります。雪が深く、ひどい北風がひっきりなしに吹いているので、いちばん家がかたまっている駅前でさえ人影が途絶えがちです。この駅には、南の大きな町から来る汽車が停まるのです。

朝から降っていた雪が丁度小止みになって、うつつらと午後の冷たい日差しが誰もいないホームを照らしています。汽車は二時間に一本しか着きませんので、駅長さんはそれまで駅長室にこもってお茶を飲んだり、本を読んだりして過ごします。午後のお茶を終えてやおら懐中時計を取り出すとそろそろ汽車の着く時間になっていました。

おやおや、もうこんな時間か。今日はちよつとゆつくりし過ぎたかな。——そんなことを考えながら壁にかけた旗と笛を外します。

こんな時間に降りる客などいまいと、思いながらも切符をしまし箱も持って部屋を出ました。

かん高い汽笛が鳴ったかと思うと、山かげから急に汽車が姿を現しました。裾から吹きだす蒸気で雪を掃きながら駅へ滑り込んで来ます。

ため息のような蒸気の音をさせて車体を大きくきしませると汽車は止まって、また辺りはしんとまりました。駅長さんはホームの端に立ってちらっと車両を見渡しました。誰も降りてこないことを見きわめて、発車の笛を鳴らそうとしたときです。いちばん向こうの車両の扉が微かに音をたてて開くと二つの人影がホームに降り立ちました。

めずらしいな。一体こんな田舎に何をしにきたんだろう——。

今日は、村の人は誰も出かけていないのを思い出しながら駅長さんは心の中でつぶやきました。あの人影は、よそから来た人達に違いないのです。

それ以上お客が降りて来る気配がないので、駅長さんは笛を鳴らして旗を振りました。

汽笛がかん高く響くと、ゆっくりと車輪が回り始め、轟音をとどろかせながら汽車は駅を離れて行きました。その轟音もひとしきり辺りを震わせるとすぐにひいて、また駅は静けさに包まれます。

汽車を見送った駅長さんは、目を出札に近付いて来る人影に戻しました。どうやら若い男の子と女の子のようです。

「やっぱりこの辺は寒いわね」

身震いしながら女の子が言いました。雪は止んでいますますが、風は相変わらず強いので真っ赤な防寒用のコートもあまり役に立たないようです。

「夏に一度来たきりだったからね。寒いとは聞いていたけれど、これ程とは思わなかったなあ」吹きつける木枯らしに目を細くしながら、隣の男の子が言いました。それでも陽気に振る舞って、沈みがちになる女の子をなんとか元気づけようとしています。

「とにかく、宿に着けば暖まれるよ」

言って、柔らかく笑った彼の笑顔を見て女の子も片笑くぼを作りました。

出札に近付いて来る二つの人影を見つめながら駅長さんは、忙しく頭を動かしました。

—— 駈け落ちかな。

こんな季節に村に旅行に来る人などいません。年格好から見ても充分に考えられることだと思いました。

だんだんこちらに近付くにつれて、二人の顔立ちもはっきり見てとれます。背高のつぼの男の子は、青年といっても良いくらいで、二十歳前後に見えました。人懐っこい目をしていて、顔立ちも穏やかです。

隣の女の子は彼の肩ぐらまでしかなく、人見知りの激しそうなおずおずとした目をしていました。年は、十五、六に見えますが、そのあどけない顔立ちを引算すれば、もう二十歳に近いのかも知れません。

二人は、出札まで来ると軽く会釈をして駅長さんに切符を渡しました。二つの切符を見て、二人が別々の駅から今の汽車に乗り込んできたことに駅長さんは気付きました。

「ちよつと、電話をかけてくるわ」

小さな声で言つて、女の子はガラス戸を開けて待合室を抜け、表に出ていきました。男の子も後に続いて待合室に入りガラス戸を閉めました。二人分の荷物を木のベンチに置くと、ダルマストーブに手をかざしながら、彼は道の向こうの煙草屋で電話をかけている女の子を見守っていました。

やがて、女の子は受話器を置いて待合室の方に小走りに戻って来ました。彼女がガラス戸を開けた途端、木枯らしが吹き込んで男の子のコートをからげました。

「良夫ちゃん。早く出ましょ」

白い息を弾ませながら女の子は、早口で言いました。男の子——良夫君は、うなずくと無言で荷物を持って外に出ました。

二人の後ろ姿を眺めながら駅長さんは、自分も若い頃に奥さんに恋をした時、彼女の両親に随分と反対されたことを思い出していました。うまく駆け落ちできればいいが——などと、お茶を飲みながら独りごちていました。

「困ったことになったわ」

うら淋しい商店街を歩きながら女の子は言いました。

「うん。真理ちゃんの顔にそう書いてある」

良夫くんは隣の女の子——真理子さんの横顔を見ながら答えました。

「母さんがこの村に向かっているの。丁度、友達がグループで旅行に行く計画を立てていたから、わたしも彼女達と一緒に行くという話にしてもらって、わたしは家を出る口実を作ってきたの。ところが、母さんがすぐに疑い始めたらしくて、その旅行の宿泊先を調べ出すと、そこへ連絡して宿泊予定者の名簿にわたしが載っていないことを突き止めちゃったのよ」

良夫君は、それを聞いて吹き出しました。

「真理ちゃんもあまり人のことは言えないな。ずいぶん間が抜けているじゃないか」

「だって……、まさかこんなにすぐに母さんが疑い出すとは思ってもみなかったのよ。母さんはそれから、手当たり次第にわたしの友達を問いただし始めたらしいの。家の方の動きが気になるでしょ。それで一番信頼のおける友達に、連絡先を教えて何かあったら電話をくれる

ようをお願いしていたのよ。彼女には可哀相なことをしたわ。何か知っていると勘付いて、お母さんにずいぶん厳しく詰問されたらしいの。なのに、連絡先を喋ってしまったことを泣きながら謝るのよ。あんなこと頼むんじゃないかった」

鼻を鳴らしながら真理子さんは言いました。

「どちらにしろ急いの方が良さそうだ。ほら、雪が降りだしたよ」

空を仰ぎながら良夫君は言いました。両親に内緒で旅に出た二人の肩に、一片、二片雪が舞いかかります。

「旅館までどのくらいあるの」

「三十分くらいかな。給料日前で不便な宿しか取れなかったんだよ」

「駅前で旅館を取れば良かったのに。お金くらいわたしがなんとかするわよ」  
言ってしまった、真理子さんは下を向ききました。

「ごめんなさい——」

呟くように言った真理子さんの肩を良夫君は優しくたたきました。

「まあいいさ。それより本当に急ごう。吹雪くと厄介だよ」

「もうひとつ厄介なことがあるの……」

言いづらそうに真理子さんは口籠もりました。

「母さんと一緒にわたしの婚約者が来るらしいの」

うつむいている真理子さんを良夫君はまじまじと見つめました。

「何だって」

「ごめんなさい。今年の秋に無理やりお見合いさせられたのよ。先方がわたしをとても気に入ってくれて、それに父さんの得意先の社長の息子なんですって。何度嫌だって言っても父さんも母さんもちやんと断ってくれないのよ」

「でも、見合いをしたってことは結婚する気があったってことだろ。いつそのこと、そのままそいつと結婚してしまえばいいじゃないか」

ちよつと口を尖らしてからかうように言って良夫君はよそを向きました。真理子さんは立ち止まって黙ったままです。良夫君は少し歩いてからもう一度ゆつくりと真理子さんに向き直りました。その顔を見た途端、良夫君は言おうとしていた言葉を呑み込みました。

真理子さんは頬を火照らせながら、涙をほろほろ零していたのです。

「わたしが……、わたしが結婚する人は良夫ちゃんだけよ。そんなこと言わなくなつたって分つてるでしょ。意地が悪いわよ」

泣きながらそれでも良夫君の目をじつと見据えて、きつぱり申しましたので、良夫君は慌てて謝りました。

「ごめん悪かった。ちよつと、やきもちを焼いただけだよ。本気で言ったわけじゃないんだから……」

「本気で言ったのなら、ここからでもすぐに家に帰るわよ」

目で脅かしながら悪戯っぽく真理子さんは言って、べそをかいたまま笑いました。

「そうね。確かに見かけは良夫ちゃんよりずっと素敵な人だったわ」

さっきの仕返しをしながら真理子さんは話を戻しました。

「でもね、とても好きになれるような人じゃなかったのよ。初めは知り合いとお食事をすると話だったの。ところが行ってみると先方の息子さんと引き会わされて——ああ、これはお見合いなんだと気が付いたのよ。良夫ちゃんとのことがあったから母も焦っていたみたいね。わたし抜きでかなり話を進めていたようなの。だから、その息子さんにレストランを出て二人でその辺りを散歩しませんかって誘われた時には、わたしの気持ち以外はもう話が半分決まっているようなありさまだったのよ。本当に話し方も上手で、一緒にいてちつとも退屈しない人だったわ」

真理子さんはまた、良夫君の顔をちらっと見て少し意地悪く笑いました。良夫君は目をそらせて平気な振りをしています。

「おしゃべりをしながら歩いていたんだけど、レストランの角を曲がったところで、子犬が飛び出してきたのよ。そしたら、その人さも当然というようにその子犬を蹴飛ばしたの。かわいそうにその犬、街路樹にしたたかぶつかって悲鳴を上げたわ。思わず駆け寄ろうとしたんだけど、ふつとその人の目を見たら……」

言いながら、真理子さんは身震いしました。

「とても恐い目をしていたわ。自分のやり方に逆らうならお前でも容赦しないぞって、言っているような敵意に満ちた目だった。わたし、射すくめられてしまつて、子犬がびっこを引いて



行ってしまおうのを見ているだけだったの」

真理子さんは目を伏せて、唇を噛み締めました。

「あの人が追って来ているのなら、のんびりしてはいただけないと思うの」

言いかけて真理子さんは息を呑みました。

「きつと、良夫ちゃんの取ってある旅館にもう連絡がいつていると思うわ」

「僕達が着いたらそこで引き止められて、君のお母さん達が追いつく。それで一貫の終わりにしてわけかい」

「たぶん、そうなるわね。駅に引き返しましょうか。次の列車で別の町に行くのよ」

「真理ちゃん。ここは僕らが住んでいるような大きな町じゃないんだよ。列車は二時間に一本しか通らない。君のお母さんは次の列車でこちらに来れるだろう。今、駅に戻ったら鉢合わせだよ」

「あつ、そうか。でも他にこの村から出て行く方法はないみたいだし……、どうしたらいいかしら」

真理子さんは、さすがのように良夫君を見つめました。

「とりあえず、この村でなんとかするしかなさそうだね。まず、もう少し先まで行って君のお母さん達をやり過ごせる場所を探そう。駅から旅館までは、一本道だから必ず通り過ぎるのを見届けられる。それから駅に戻って次の列車で村を出ればいい」

「でも、列車の時刻がうまく合うかしら。お母さんきつと、旅館にいないと分かっただらすぐ駅

に戻って来るわ」

「大丈夫だと思うよ。次の列車は下りの三十分後に上りが来るようになってるんだ。旅館までは、片道三十分かかるから間に合いっこないさ」

二人は軽くうなずき合うと、白い息を吐きながら歩き始めました。雪が降りはじめた小さな商店街を抜けて、肩をくつつけるようにしながら二つの人影は遠ざかっていきました。

それから三十分後、二人は見渡す限りの雪野原の真ん中に立っていました。遠くの山裾の方に農家がちらほらと雪を被って建っているほかは、人の住んでいる気配すらありません。雪も風もますます勢いを増しながら二人に襲いかかってきます。とっくに二人の防寒着は役に立たなくなっていて、がたがた震えながら何とか進んでいる有様でした。

「良夫ちゃんて昔から方向音痴だったけれど、ひどくなってきたるんじゃない」

真理子さんが紫色に染まった唇を尖らせながら言いました。

「そんなことあるもんか。この頃じゃあ地下鉄に乗っても迷子にならなくなったし、店の配達だって一人でできるようになったんだ」

負けずに良夫君も言い返します。

「でも、現実に雪野原で迷子になってるじゃない。どこの世界に一本道で迷子になっちゃう人がいるかしら」

言いながら、真理子さんは笑い出してしまいました。つられて良夫君も笑いしました。

「とにかく、雪が止むまでどこかで休ませてもらおう」

「どこかって、どこに家があるの」

おどけるように真理子さんは辺りを見回しましたが、小刻みに震えている肩はとてもおどける余裕などないことを物語っています。

「あそこの家さ」

百メートル程先に見える櫛の林を指さしながら良夫君は言いました。二人が辿ってきた道は——もつとも、二人が道だと思っただけかも知れませんが——その中へと続いていたのです。

「ぼくの勘ではあの林の中か、林を抜けたところに家があるはずなんだ」

「あきれた。良夫君ちゃんたら、いつからそんないい加減なこと言うようになったの」

「しようがないじゃないか。はるか向こうの農家まで行くのは無理だし、とにかくもう少し先へ進もうよ」

言いながら良夫君は先に歩き出しました。真理子さんもじつとしているよりはまじだと思いましたが、慌てて後について行きます。雪に足を取られないように気をつけながら、二人はとぼとぼとその林の中へと入って行ったのでした。

「思ったより深い林だね」

良夫君は、引きつったような笑い方をしながら言いました。

「ごまかしたってだめ。引き返しまよ」

「うん。そこの角を曲がって何もなかったらね」

良夫君は歩く速度を速めました。真理子さんはその背中に向かって「意地っ張り」と言おうとして止まりました。その代わりにちよつと肩をすくめると、先に行く良夫君の背中を見ながらくすつと笑ったのです。

「ほらごらん。ぼくの勘は当たっただろ」

角を曲がったところで良夫君は目を輝かせました。

樅の林はそこで切れていて、少し窪んだ土地がありました。そこに周りをぐるっと丸太の垣根で囲んだ山小屋のような家が建っていたのです。その屋根から石造りらしい煙突がによつきりと生えていて、白い煙が風に流されながら昇っていました。人が住んでいるのは間違いないありません。

寒さで体が麻痺してくたくただった二人も、それを見ると思わず駆け足になって山小屋の戸口に向かいました。

！、！、！。

見るからに重そうな櫺の木戸を良夫君はノックしました。けれども、鈍いノックの音が返ってくるばかりで、人が中で動く気配は感じられません。

「おかしいわねえ。煙突から煙が上がっているんだから、人がいるはずなのに」

真理子さんが首を傾げながらそう言った途端、何の前触れもなしに木戸が軋みながら半分ほど開いたのでした。

中から顔を出したのは十四、五ぐらいの少年でした。抜けるように色が白く、目にはその年ごろに見られるはずの活気がまるで感じられません。辛うじて二人の来訪者に対する警戒心がその目に揺らいでいるだけでした。

「この雪で道に迷ってしまったのです。すみませんが、雪が止むまで休ませてもらえませんかでしょうか」

良夫君が説明すると、少年はなぜかほっとした様子でにっこり笑いました。

「それはお困りでしょう。どうぞお入りなさい」

と大人びた口振りで言って、二人を中へ通してくれたのです。

小さな三和土を上がると一番奥まで廊下が続いていて、両側に二つづつ扉があります。ふと後ろを振り返った良夫君は、今入ってきた扉に教会の鐘のような形をした小さな銀の鈴がぶら下げてあることに気が付きました。そんなところに鈴がぶら下げていること自体奇妙でしたけれど、それにも増して不思議だったのは別に壊れている風でもないのに、扉を開け閉めた時に少しも音をたてなかったことでした。

少年は手前の左側の扉を開けて、二人を中へ案内しました。その時、彼がとても綺麗なえんじ色のセーターに黒いズボンをはいていることに真理子さんは気が付きました。

部屋の中はとても暖かで、雪の中を歩いてきた二人はしばらくぼうつとなりました。扉と反対側の壁に暖炉が切つてあつて中で薪が盛んに燃えています。部屋の真ん中にテーブルがあつて、その両側にソファ―が置いてありました。テーブルの上には三本の蠟燭を立てた燭台が置いてあつてそれが部屋を照らす唯一の照明でした。そして蠟燭の向こう、ソファの端に一人の少女が座っていたのです。

歳は少年と同じくらいでしょうか。目の醒めるような葡萄色の洋服を着ていました。絹か、ベルベットみたい。真理子さんが思わず目を見張った程見事なドレスでした。

二人を迎え入れた少年とは好対照に少女の顔は、生気に溢れていました。面長で整った顔立ちをしているのですが、その歳に似付かわしいはずのあどけなさがほとんど影をひそめて、真理子さんと同じくらい大人びた印象を与えています。

その瞳はじつと二人の外来者を見据えていて、その気性の激しさを物語っているかのようにでした。

「この吹雪で道に迷われたんだそうだ」

少年が事情を説明すると少女もほつとした様子で目に見えて瞳が穏やかになりました。

「それはお困りでしょう。狭い家ですけれど、どうかゆっくりして行って下さいな。今、お茶でもいれます」

低いけれどよく通る声で言うと、少女は席を立って部屋を出て行きました。

「外は寒かったでしょう」

そういつて少年は、ソファを暖炉のそばに寄せて二人に勧めました。  
「旅行ですか」

すっかり愛想良くなった少年が尋ねました。

「だって、村の人ならこんな日に出歩いて道に迷ったりしないでしょう」  
「ええ、旅行みたいなものですよ」

良夫君は言葉を選びながら答えました。

「気に障ったらごめんなさい。——あなた方はお互いに愛し合っているから。だのにご両親が反対してあなた方の仲を裂こうとするので家を出て来た。——そんな風に見受けられるのですが」

まだ十五くらいに見えるその少年は、にこやかな表情を崩しません。

良夫君は、いささか礼を欠いた少年の言葉に怒るより、呆気に取られてしまいました。良夫君も真理子さんもどう答えて良いのか分からず、ひとしきり気詰まりな沈黙が流れました。

「だめねえ。そんな風に言ったら、お気に障るに決まっているじゃないの」

ちょうど具合良く先程の少女がお盆を持って戻ってまいりましたので、気まずい雰囲気はまた和やかさを取り戻しました。

「ごめんなさい。失礼な言い方をして」

少年をたしなめるように見ながら、少女は言いました。

「今日はクリスマスイヴでしょ。だからこの人、そんな言い方をしたんですわ」

少女は、お客に紅茶とお菓子を勧めました。

良夫君と真理子さんは、わけが分からず目を見合わせました。

「冷めないうちにどうぞ」

重ねて少女がお茶を勧めますので、二人は礼を言ってティーカップを取りました。

熱い紅茶が、冷えた体の隅々までいきわたって、ほうつと真理子さんはため息をつきました。

「変わった紅茶ですね」

「温まりますでしょ。入れ方に秘密がありますの」

にこやかに少女は、微笑みかけました。

「さつき、そちらの方がおっしゃった事は大方当たっているんです」

小屋の住人があまりに大人びて振舞いますので、自然と真理子さんの口調も改まってしまします。

「わたし、真理子といいます」

「良夫です」

「わたし達、従兄妹同士なんですけど小さい頃家が近かったので、どちらかというど幼馴染みみたいにして育ったんです。わたし小さい頃から人見知りが激しくて、よく無理を言って



は良夫ちゃんを困らせていました。でも、良夫ちゃんは一度だつていやな顔をしたことがないんです。わたしが悲しいときは一緒に悲しい気持ちになってくれたし、困った時は必ず親身になって考えてくれましたから、いつのまにか一生、良夫ちゃんのそばに居たいって思うようになっていたんです」

「僕も、いつも後からついてくる小さな女の子が可愛くつてたまらなかつたんですよ」  
「でも、ご両親はあなた方ほど仲良しじゃないのですね」

真理子さんを見つめる少女の瞳には、興味半分なところは少しもありませんでした。

その代わり、まるで何十年もの人生を行き抜いた女のように、落ち着いた優しさに溢れていました。

「ええ。うちの親族がお金持ちを鼻にかけていたことがそもそもの原因だと思うんです。叔母が、良夫ちゃんのお父さんと結婚する時に恩着せがましく高額の持参金をつけたんだそうです」

ひと息つくと真理子さんはティーカップを口に運びました。彼女がお茶を飲んでいる間に良夫君が話を引き継ぎました。

「父はかんかに怒ったらしいのですが、母のことは大好きだったんですね、けっきょく結婚はしたのです。けれど、親戚付き合いをまるでしなかつたので、今度は真理ちゃんの親族が怒りだしました。『あいつは学のあることを鼻にかけてる』と言って。赤字続きの工場を何とか切り盛りしている貧乏暮しでしたけれど、首席で大学を卒業したことを父は自慢にしてい

ましたから」

紅茶を飲み終えた真理子さんが後を引き継ぎます。少女は真理子さんの目を見つめたまま真理子さんのカップに紅茶を注ぎました。

「あからさまには、どちらの両親もわたし達が仲良く遊んでいるのを見ても、目くじらを立てるようなことはしませんでした。でも一昨年、良夫ちゃんが高校を卒業した日に結婚したいって話したら、問答無用で離れ離れにされてしまったんです。わたしは、全寮制の女子校に転校させられるし、良夫ちゃんも一日中工場の仕事で外出できないようにされるし。――あんなに、わたし達の両親が協力して一つ仕事をしたことって今までなかったんじゃないかしら。友達を通じて手紙は、やり取りできたんですけど監視が厳しくって今日までずっと逢うことができなかったんです。でも、良夫ちゃんは二十一、わたしも十九、自分のことは自分で決められる年だわ……」

「誤解しないでくださいね。僕達駆け落ちして来たわけじゃないんですよ。明日の夜までには家に帰るつもりです」

良夫くんは言い足してティーカップを口元に運びました。

ひとしきり言葉が途切れて、思い出したように熾のはぜる音が耳に入ります。

木枯らしが窓を震わせて、小屋の外が吹雪いていることを皆に思い出させました。

「さつき、クリスマスイヴだからっておっしやいましたよね」

真理子さんが口を開きました。

「ええ。クリスマスの前の夜にはあなた方のような恋人たちがこの小屋にやって来るといいう言  
い伝えがありますの」

少女の表情は至って真面目でした。

「変に思われるのも無理はありませんけれど、この小屋を守る者にはこんな言い慣わしがあ  
ります。——もし、クリスマスイヴの夜に若い男の子と女の子が訪ねてきたら、お茶をご馳  
走して遇してあげなさい。そのふたりは、愛し合っているのに両親にそれを許してもらえな  
った恋人達なのだから——と」

言って少女は笑みを浮かべました。この小屋にはこの二人しか住んでいないのかしら。真理  
子さんは改めて不思議に思いました。

「そして、もし追っ手が来たならば必ず匿ってあげなさい。——そう続くんです。でも、本当  
に誰かが訪ねてきたのはあなた方が初めてですわ」

「何か、その言い伝えの抛り所になる話がありそうですね」

良夫君は、ビスケットに手を伸ばしながら尋ねました。

「ええ。良かったらお聞きになります？吹雪が治まるまでにはまだしばらく間がありますわ」

「どうせ止むまでは出発できそうもありませんよ」

少年も口をそえました。

「良かったら教えてください」

良夫君の返事にうなずいて、少年はひとしきり暖炉の熾をかき混ぜておいて、部屋を横切り少女の隣に座りました。

「言い伝えと申しても、何百年も昔の話ではないのです。今から百年くらい昔、明治の終わりが大正の初め頃の話だそうです。この辺り一帯の土地はその頃白沢伯爵という華族の所有でした。先代が維新に手柄があつたとかで相当に羽振りの良い家柄だったそうです。その当時の当主は、白沢恭一郎という人で当時としては進歩的な人物でした。この小屋にしてもそうですけれど、一切が西洋好みで東京にある本宅もわざわざイギリスから設計技師を招くほどの凝りようでした。そのくせ、合理主義などころもあつて無駄なところにはあまりお金を掛けないよう心がけていたようです。この小さな山小屋を避暑のために建てた時も、どうせ家族は、奥様と一人娘の涼子の三人なのだからこれだけの広さで十分だと言つて、大げさな屋敷にしなかつたのです。事の起こりは、その年の12月25日、一人娘の涼子様の誕生祝いの折でした」

「あら」

真理子さんが声を立てました。

「わたしと同じ誕生日だわ」

「あら、そうです。不思議な偶然ね」

一瞬少女の顔がほころびて、あどけない笑顔がよぎりました。

「その誕生祝いの席は、涼子様にとって別な意味があつたのです」

そのまま少女は、話を引き継いで話し始めました。小屋の住人達が大昔に生きていた人々の名前に「様」をつけて呼んでいるのに、真理子さんはあまり違和感を感じませんでした。もし、真理子さんの友達がそんな話し方をすればすぐに吹き出してしまうはずなのに、彼らの口調には聴く者の口を噤ませてしまうような奇妙な威厳があったのです。

「十五歳になるその誕生日に、涼子様はお見合いをすることになっていたんです」

「十五歳で——？」

思わず真理子さんは聞き返しました。

「その頃としては、あまり珍しいことじゃなかったようですわ。——ですから、その日の招待客の中にお見合いの相手の小泉和彦様もいらっしやったのです」

『小泉様のお着きです』

「白沢家の執事がこう告げたことがそもそもその間違いだったのです。なぜって、その日の招待客には『小泉様』が二人いらっしやったのですから。小泉和彦様ともう一人同姓の小泉志郎様。何でも、白沢の遠縁に小泉姓を名乗る家が多かったのだそうです」

『ようこそ。いらっしやいました』

「父の恭一郎様の言い付けで涼子様がにこやかに迎えたのは、小泉志郎様だったのです。涼子様は、人目見て志郎様が好きになってしまいました。女だてらにはしたないと、あの頃の人々なら申すのでしようけれど、現実には涼子様と志郎様は、その場で好き合ってしまったのですからしようがないですわ涼子様は、元々勝ち気で負けん気の強い性格。志郎様は、穏やかで争い事を避けて通るといった性格だったそうですから、互いに自分の持ち合わせない性分に惹かれ合ったのかも知れませんね。とにかく、涼子様は見合いの相手と思いついで夢中で志郎様を遇しました。ですから、当の小泉和彦様が遅れて到着した時には、一人は手を取り合ってダンスを踊っているような有様でした。年が明けて早々に、小泉和彦様のお父上から抗議の使いがまいりました。和彦様の面目を潰したと大変なお怒りようだったのです。それを聞いて白沢伯爵も大変驚き、行き違いのあったことを直ぐさま詫言いました。そして大急ぎで改めてお見合いの席をもうけようとしたのです」

ふつとため息をついて少女は一休みし、紅茶を口に運びました。顔を上げたとき、目尻に少し皺を寄せて口の端を曲げていました。

どこか遠くを見ているみたい。宙を見据えたその瞳を見ながら真理子さんは思いました。

「涼子様は、その話を嫌がったんですね」

言い淀んでいる少女に代わって真理子さんは口を開きました。

「けれども、お父様の白沢伯爵はそれをお許しにならなかつた。そうじゃないかしら」

真理子さんの言葉に少女は黙ってうなずきました。

「……どんな理由であれ、愛し合っている二人の仲を裂くというのは残酷なことだと思います」

気を取り直したように居住まいを正すと、少女はまた話し始めた。

「家の格式から言えば、和彦様も志郎様も同等なんです。ですから、志郎様との縁談に変えてしまっても問題はないように思いますのに……。けれど今と違って、体面を何より重んじる時代ですから、一度交わした約束は違えづらかったのかも知れませんね。涼子様は、先程申しましたように勝ち気な方でしたから、お父さまの言葉にも負けず『私、志郎様以外の殿方と結婚する心算などございません』ときっぱり言い切ったそうですが、これには志郎様がお好きだったということ以外に、和彦様がお嫌いだった——いえ、和彦様を恐れていたということもあつたのだと思います」

「恐れていた？」

「ええ。誕生パーティーの日、涼子様は見てしまったのです。丁度志郎様とダンスのたけなわに案内されて入ってきた殿方が、自分の方を見て薄笑いを浮かべているのを。蛇が一睨みすると獲物が竦んでしまうと申しますでしょ。涼子様はその男の眼差しから目を逸らせることができなくなってしまうのです。お陰でステップを間違えてしまって……。志郎様が素早く抱えて下さらなければその場で転んでいたことでしょう。今も昔も、上流社会、社交界などという所は口さがない世界なのでしょうけれど、涼子様が後刻お友達から伺った和彦様の噂も芳しくないものばかりでした。生来独占欲が強く、最近も絵画の競買で競り負

けた折、競り勝った相手に難癖を付けて喧嘩をしかけて相手に深手を負わせたことがあるといったような話だったので。涼子様はその話を父に告げ、重ねて志郎様と結婚したいと申し出たのです。もとより、伯爵は古い因習には拘らない進歩的な考え方の持ち主でしたし、他ならぬ愛娘の涼子様のたつての願いでしたから、何とか涼子様の願い通りにしてやりたいと一度は考え直したのです。ただ、板挟みになった志郎様のご家族の苦労を見るに付け、更に涼子様が二度までも志郎様を連れて駆け落ちしようとなさったこと——二度目は、一週間も行方がつかめず、伯爵は大いに気を揉んだのです。——ここに至って決心せざるを得ませんでした」

「涼子さんが、志郎さんを連れ出したんですか？」

良夫君は、思わず口を挟みました。

「ええ。本当に勝ち気だったのですね」

少女は口元をほころばせました。

「志郎様が持病の心臓発作を起こしたことが元で見付け出されていなければ、二度目の駆け落ちで、人知れず夫婦になって暮らすことができたでしょうに……。ともかく、連れ戻された涼子様に伯爵は言い渡しました。涼子様の十六の誕生日に結納を交わし、年明け早々に和彦様との婚礼を行なうと」

少女はまた深いため息をつきました。

「可愛そう」



真理子さんが小さな声でつぶやきました。

「でも、そういった理不尽はあの時代に限らずいつの時代になってもあるものじゃないかしら」  
少女はまたあの慈愛に満ちた目で真理子さんを見つめました。

「考え抜いた挙句——。涼子様は三度目の駆け落ちを図ることにしたのです。厳重な警戒が布かれていたにもかかわらず、可愛がつてくれていた乳母の機転と手引きで涼様は屋敷を脱出し、志郎様と東京を離れたのです」

何を思い迷ったのか、少女はしばらく暖炉の火を見つめて黙っていましたが、やがて億劫げに口を開きました。

「十二月二十四日の朝、この小屋から一里……4キロメートル程離れた村の外れで二人がこの小屋の方に向かって歩いて行くのを村人が見かけています。そして多分、それが二人の生きている姿を誰かが見た最後だったのです」

良夫君と真理子さんは、息を呑んで少女の口元を見つめました。

「その日は、朝から小止みなく雪が降っていたので二人の足跡もすぐに消えてしまい、逃れるものにとっては恵みの跡隠しの雪となりました。その日の夕方頃、もう一人の旅人がその村に辿り着きました。小泉和彦様です。和彦様は、村に一軒の旅館に部屋を取るとすぐに居酒屋に出かけました。この辺りは、当時から保養地として開け、温泉も湧いたので村とはいいながら、旅館や居酒屋もあったのです。和彦様はお酒を呑みながら亭主を相手に、自分は許婚を救いに来た、明日夜が明けたら患者から取り戻すのだと盛んに息巻きました

た。挙句には、店に来ていた村人に絡んで喧嘩になり、一発で殴り倒されてしまって、村の駐在所に担ぎ込まれたのです。一方、東京の白沢家では涼子様の蒸発で大騒ぎになっていて、伯爵は心当たりには全て使いを出しておりました。避暑のための山小屋のあるこの土地にも東京から使いが来ていて、丁度駐在所に居合わせたのです。何度もお屋敷でお見掛けしておりましたので、その使いの人が和彦様の身元をすぐに保証しました。和彦様は正体なく酔って取り留めのないことばかり申しましたが、それでもその話をまとめると、和彦様と昵懇じっこんだった白沢家の女中から二人の駆け落ち先を知ったこと、何とか涼子様を取り戻そうとここまで追ってきたこと、吹雪があまりにひどいので今晚はこの村に泊まって明日避暑小屋に向かおうと考えていたことが分かりました。更に、その日の朝二人を見掛けたという村人も見つかかり、二人がこの小屋に向かったのは間違いないようでした。使いの人は、その足ですぐにこの小屋に向かおうとしたのですが、既に夜は更けており、吹雪は一向に止みそうもなくてどうすることもできません。夜明けを待つて駐在さんの案内で、和彦様ともども向かうことになったのです。翌朝は、昨夜の吹雪が嘘だったような好天で、三人は雪道を半時ばかり歩いてこの小屋に着きました。もちろん小屋の周りには、足跡一つない新雪でしたが、小屋は内側から門式の鍵が掛かっていましたので、誰かが中にいることは確かのようにでした。ですのに、何度戸を叩いても返事がありません。とうとう扉を壊して中に入るようになったのです。三人が最初に入ったのは、左手の手前のこの部屋でした。扉を開けると窓から差し込む朝日が、床に倒れた二人を照らしていました。志郎様が仰向

けに倒れ、それを庇うように涼子様が俯せに重なり合って倒れていたのです。急いで駐在さんは、脈を取ってみましたが、そうするまでもなく随分前に冷たくなってしまったことは明らかでした。使いの人と駐在さんの二人がかりで涼子様を仰向けにしてみるとその胸には、薄刃のナイフが深々と刺さっていて、彼女の死因を物語っておりました。志郎様もこの人と――

言つて少女は少年の方をちらりと振り返りました。

「同じようなえんじ色のセーターを着ていて少し分かり難かったですけれど、胸に同じ刺し傷があり、それが致命傷になっておりました。駐在さんはなかなか目端の利く人で、部屋を見回して二人が死んだのは、小屋に着いて間もなくのことだと見て取りました。荷物が解かれていますし、暖炉も使われた跡がなかったからです。薪はこの山小屋の裏に薪小屋があるので、後で調べてみるとその小屋すら開けられていないことが分かりました。それから駐在さんは、青くなつて震えている和彦様と使いの人を外に出して、手際よく小屋の中を調べました。ところが、不思議なことに残りの三室――二つの寝室と食堂です――にも誰一人おらず、窓は全て内側から鍵が掛かっていたのです。入り口は先程壊した扉しかありませんので、もし二人が殺されたのだとすると、二人を殺した犯人は宙に消えてしまったことになります。二人の荷物に食料と衣類がふんだんにあって、ここで暫らく暮らすつもりだった様子に駐在さんは首を傾げましたけれども、心中と判断するより他はなかったのです。東京に悲報が伝えられて愁嘆場の中、二人の遺骸は引き取られていきました。二

人のご葬儀が済まされた頃、一つの噂が社交界の中でひそひそと囁かれておりました。『和彦様があのお二人を殺して心中に見せ掛けたのではないのか』『いやそれどころか、お二人を殺しておいて平気な顔で村に現われ、駐在や白沢の家の使用人と一緒に二人の死の発見者に成り済ましたに違いない』——和彦様を良く思っていない人々は口を揃えてまるで真実を語るように中傷し合いました。けれども、密室から脱出する方法を説明できるものは誰もなく、そんな噂話も尻つぼみになっていったのです。お二人の死は悲しいできごとでしたけれど、時が移るにつれて社交界の人々にとっても、白沢家や小泉家の人々にとってもそれは一つの思い出話に変わっていききました。けれども、雪深いこの土地の人々は今でも二人の悲しい恋物語をロミオとジュリエットのように、冬の夜話として時折り語るのです。こうして、見知らぬお客さまを迎えた夜などにはね」

少女は真理子さんの目をじっと見つめていました。

『十二月二十四日。もし、若い男女がこの小屋を訪ねてきたなら、お茶をご馳走して遇してあげなさい。そして、もし追っ手が来たならば必ず匿ってあげなさい。そのふたりは、愛し合っているのに両親にそれを許してもらえなかった恋人達、涼子様と志郎様の生まれかわりなのだから』——これが、この小屋を守る者の言い慣わしになっているのです」

語り終えて少女は、また深いため息をつきました。

「あら、話に熱が入りすぎて、お茶を切らしてしまいましたね」  
言って少女は立ち上がろうとしました。

「待って」

真理子さんが急いでそれを引き止めました。

「そんなはずないわ。その二人がそんな形で心中するはずがない……」  
「でも、……」

「たとえ、すぐに後を追うつもりでも、愛する人が死んでいく姿をじっと見ているなんてできるはずがないわ。ナイフで胸を貫いて死ぬのなら二本用意して、二人同時に死ぬるようにすると思う。でなければ、毒を用意して一緒に呷るとか……。ともかく、涼子様は恋人の亡骸を前にして決して、一人でまだ生きているなんてできないはずよ」

真理子さんの肩が震えました。それをじっと見ていた少年は、少女の方を振り返って小さくうなずきました。

「この話には、後日談があります。二人が亡くなつてから十五年ほど後の話です。小泉和彦は、結婚して二児の父親となり、東京でも羽振りの良い貴族になっておりました。その年の秋頃から、その和彦の様子がおかしくなり始めたのです。あらぬ物が見えて人前も憚らず急に暴れだしたり、急に泣き出したりする始末です。その振る舞いは、年の瀬が近付くにつれて酷くなる一方でしたが、とうとう十二月の半ばに、『あの二人が、帰って来る』と謔言のようにつぶやきながら、屋敷を出てそのまま蒸発してしまったのです。十二月二十四日の夕方、この小屋の近くを歩いていた二、三人の猟師が、物凄い断末魔の悲鳴を聞

きつけました。駆け付けると扉には鍵が掛かっていましたが——随分前に修繕されていたのです——構わず壊して中に入りました。十五年前と同じこの部屋で、和彦は死んでいました。胸には薄刃のナイフが刺さっていて、それ以外にもう一ヶ所胸に刺し傷がありました。あの駐在さんがまた呼ばれて、仔細に調べましたが、小屋の中には和彦以外に誰も居なかったこと、小屋の窓には全て内側から鍵が掛かっていたことは、駐在さんに嫌でも十五年前の事件を思い出させました。もつと不思議なことに、その数日は雪が降らなかったのに、小屋の周りには猟師と和彦のもの以外、足跡が一つも残っていないかったです。十五年前と同じで、駐在さんは首を傾げながらも、自殺と考えるほかありませんでした」

「でも、駐在さんは間違っていたのです」

少女が話の後を引き継ぎました。

「だって、その時犯人はこの小屋に居たのですから。いいえ、それから百年経った今でもこうしてこの小屋から離れることができずにいるのです」

少女の目が、妖しく輝きました。

「あなた方……、幽霊なの？」

真理子さんの問いに少女は少し淋しそうな笑みを浮かべてじつと真理子さんを見返しました。沈黙の中、思い出したように薪の燃える音が聞こえ、雪をはらんだ木枯らしが林を吹き抜けて、窓ガラスを震わせました。

「あの日、復讐を遂げるために私達は小泉和彦を殺したのです」

少女は真理子さんの目をじっと見たまま瞬き一つせずに行いました。

「でも……」

良夫君が口を挟みかけると、少女は軽く首を振ってそれを制しました。

「でも、小泉和彦が十五年前に殺人を犯した後、密室だったこの小屋からどうやって脱出したかとおっしゃりたいのですね」

「ええ」

「もうヒントは差し上げましたのに……。お二人は、いえ厳密に言うとは涼子様はこの土地のロミオとジュリエットだったのです」

良夫君と真理子さんはロミオとジュリエットの物語を思い出しながら、考え込みました。

少女はいたずらっ子のような目で暫らく二人を見つめておりましたが、また真顔に戻って先程の淋しそうな眼差しを浮かべると口を開きました。

「涼子様は、ロミオと同じ過ちを犯し、ジュリエットと同じ行動を取ったのです」

「あの日、正午過ぎに二人は、この小屋に辿り着きました。外は、吹雪で凍えそうでしたので荷を解くのを後回しにして、志郎様は薪を取りに小屋の裏手に行こうとして、小屋を出たところで和彦に出くわしたのです。人々が噂していた通り、和彦は二人を追って来ていたのです。やにわに、和彦は用意してあったナイフで志郎様を刺すと、後も見ずに逃げ出しました。志郎様さえ殺してしまえば涼子様の気持ちも変わると短絡的に考えていたのですね。いつまで待っても戻らないので涼子様は、心配になって小屋を出ました。そして雪に半ば

埋もれて倒れている志郎様を見付けたのです。駆け寄って脈を取ってみると、とうの昔に事切れていることが分かりました。その時、涼子様は、ロミオと同じ過ち——自分の恋人は死んだのだと誤解したのです。薄刃のナイフで刺されたので出血もひどくなかったこと。吹雪が辺りの血をすぐに隠してしまったこと。えんじ色のセータを着ていて血が見分けにくかったこと。度々、それまでも心臓発作で倒れていたこと。気が動転していた涼子様が誤解するのにも無理ありませんわ。でもあの時、志郎様は死んだのではなく殺されたのだと気づいて下さっていたら……」

少女は唇を噛み締めました。

「泣きながら涼子様は、志郎様の亡骸を小屋の中のこの部屋に引きずるようにして運んだのです。後から、後から、降る雪は、引きずった跡も瞬く間に消してしまいました。扉の鍵をきちんと掛けたのは、二人きりになりたかったからです。真理子さんがおっしゃったように涼子様は決して恋人の亡骸を前に、一人で生きていることなどできなかつたのです。志郎様の亡骸を床に横たえろと涼子様は直ぐさま立ち上がりました。そして、その壁に飾ってあった恭一郎様の狩猟用のナイフ——親族の狩猟仲間が揃いで作らせたもので和彦様の持つていたものと同じナイフです——を外すとジュリエットと同じように迷うことなく自分の胸を貫いたのです。涼子様は志郎様に接吻しながら息を引き取りました。でももし、志郎様が死んだのではなく、殺されたと気づいてくださっていたら……」

少女はまた唇を噛み締めました。



「あのご気性ですもの、和彦に復讐こそすれ自殺することはなかったでしょうに。そうすれば、私達だって……」

言いかけて少女は、はつと顔を上げました。

「お父様とお母様が呼んでいる。もうあまり時間がないんだわ」

「お父様と、お母様って？」

真理子さんが怪訝そうに尋ねました。

「もちろん、小泉志郎と白沢涼子です。私達は二度目の駆け落ちの時に母に宿り、生まれる前に母とともに死んだ双子の兄弟なのです」

良夫君と真理子さんは顔を見合わせました。だって、目の前の二人こそ、その志郎様と涼子様の幽霊だと考えていたのですから。

「小泉和彦は、本人も気付かないうちに私達四人の家族を殺してしまいました。父小泉志郎を殺すことで同時に母の魂も葬り去ってしまったのです。魂を失った人間が生きていけないはずがありませんもの。母が自ら命を絶ったのも、私達が母と運命をとにもすることに なったのも、全て和彦の犯した罪なのですわ。ですから、何が起こったかも分からぬうちに殺された父と、最後まで父は病で死んだと信じていた母に代わって、私達が和彦を殺したのです。でも、人を殺した罪は罪。罰として私達の魂はこの小屋を離れることができなくなっ たのです」

一度口を噤んでから、少女はまた何か言おうとして口を開きかけましたが、すぐに目を

伏せて唇を噛みました。

「あなた方の魂が救われる方法はないの」

真理子さんが誘い水を向けると少女の顔が輝きました。

「百年前、私達を罰した方からこんな風に告げられました。『この小屋にまつわるこの物語を忘れずに待ちなさい。いつかその言い慣わしの通り、クリスマスの前夜に愛を誓い合った者達がこの小屋を訪れるだろう。彼らは、あなた方の父母の代理人となる為に彼方より旅をして来る者達である。もし、彼らが正しき人々であり、知恵に向かう心を持つ者であれば幸いである。彼らは、あなた方の父母がなすべきであった役目を果たすだろう。その時、あなた方の魂は初めてこの小屋から解き放たれ父母の魂があなた方を迎えに来る。四つの魂がともに天に昇る時、この小屋の戸口にある音色を持たぬ銀鈴が祝福の音を響かせる。その音色を耳にした時こそ、子供達よ。あなた方の魂とあなた方を呪縛から解き放ち救い出した者達の愛が真実祝福される時である』」

少女はひと息ついて後を続けました。

「毎年、クリスマスイヴの夜になると小屋の外で父と母が私達を呼ぶ声が聞こえるのです。でも、私達はこの小屋から出ることはできない。やがて声が小さくなって、しまいに消えていくのを、術もなく見送るしかなかったのです」

「もし、私達が役目を果たせなかったらどうなるの」

真理子さんは、おそろおそろ尋ねました。

「また、待つしかありませんわ」

あと百度か、二百度か、彼らがこの寒々とした小屋で迎えなければならぬクリスマスを思い遣って真理子さんは身震いしました。

「良夫ちゃんどうしよう」

「落ち着きなよ」

良夫君は、真理子さんを優しくなだめました。

「何か、ヒントはないんですか」

良夫君は、少女に尋ねました。

「いいえ。私達が告げられたのはさっきの言葉だけなのです」

言って少女は少年の方を振り返りました。

少年は眉間に皺を寄せて、困ったような顔をしました。

「『答は自ずと分かる』とその方はおっしゃただけです」

言ってから少年ははっと天井の方を見上げました。

「声が遠ざかっていくわ」

少女は悲しそうに言いました。良夫君と真理子さんは俯いて考え込みましたが、どうすれば良いのかは一向に分かりませんでした。ただ一つ、良夫君も真理子さんもこの二人の幽霊と話をされていて、気に掛かることがあるにはありました。けれどもそれは、取るに足らな

いことのように思えてなかなか口に出せなかったのです。

「ごめんなさい。とても正しい答など導きだせそうにない」

しばらくして、良夫君は首を振りながらそう言いました。

「だから、せめて僕達にできることをさせて下さい」

「私達にできること——」

もの問いたげな真理子さんに良夫君はうなずき返しました。その目を見て、真理子さんは良夫君も多分自分と同じことを考えていたのだと知りました。

「君達の生まれることをご両親は知らずに亡くなってしまった。生きていれば君達に、おいしい食べ物や、楽しい遊びや、愛や、知恵や、躰や、そういった沢山の贈り物をして下さったことでしょう」

良夫君は二人に向き直って言いました。

「そんなご両親の代理を務めよと言われても、僕達には何の持ち合わせもないのです。ですからせめて、もし僕達が誤っていてこれからまた長い年月この小屋に留まることになったとしても——あなた方二人が互いを呼び合えるように、あなた方に名前を贈らせて下さい」

この二人が一度も名前でも前で呼び合わないことに、良夫君も真理子さんも気が付いていました。生まれる前に死んでしまった子供たちは、名前すら持っていないということに二人は思い当たったのです。

良夫君は思索するように目を細めて少女を見つめました。

「小泉志郎さんと涼子さん夫妻の長女であるあなたに、僕の一番大切な人の名前をあげよう。今から君は小泉真理子さんです」

良夫君の隣で真理子さんが居住まいを正しました。

「じゃあ、わたしはあなたの名付け親にならせて」

生真面目に真理子さんは少年を見つめました。

「小泉志郎さんと涼子さん夫妻の長男であるあなたに、わたしの一番大事な人の名前をあげるわ。今からあなたは小泉良夫さんよ」

木枯らしが突風となって小さな小屋を揺るがしました。風はひとしきり大きな音を立てて吹き過ぎると辺りはまたしんとなりました。四人とも息をつめて何かが起こるのを待ちましたがそれ以上何の訪いもありませんでした。

「ありがとうございます」

少女はあどけない笑顔を浮かべて、立ち上がりました。続いて少年も立ち上がって口を開きました。

「あなた方はもう行かなくちゃいけません。今から駅に行けば最終列車に間に合います。さあ、お急ぎなさい」

「でも、……」

言いかけた真理子さんに少女は首を横に振りました。

「本当に見ず知らずの私達に良くして下さってありがとうございます。これから待ち続ける

日々の励みになりますわ。だから今度は、私達がお役に立たせて下さい。あなた方を追ってきた人達は今、旅館で足止めされています。その周りだけまだ暫らく吹雪が止みませんから——。ですから、今のうちにお行きなさい」

少女は部屋の扉を開きました。

「お礼を言わなければいけないのは僕達の方ですね」

良夫君は真理子さんを先に行かせながら、戸口で立ち止まって少女に言いました。

「結局何の役にも立てなかったのに、君達は約束通り僕達を匿ってくれた」

「いいえ。こんな素敵な名前を下さったじゃないですか。本当にクリスマスに相応しい素敵な名前……。きつと、この名前を大切にしますわ」

「さあ、雪が小止みになっているうちに急ぎなさい」

少年が後ろから少し急かすように言いました。

「この小屋を出たら、樅の林の梢にひときわ輝く星が見えます。その星を目指して真っすぐに進みなさい。そうすればほどなく駅に出られますよ」

玄関先で靴の紐を締めた二人の旅人は、もう一度振り返って小屋の住人たちを見やりました。名前をもらったばかりの小泉良夫君と小泉真理子さんは静かに笑って頷きました。

「どうぞ、僕達の分まで幸せになつて下さい」

小泉良夫君がそう言うと、名付け親の真理子さんは目尻に涙を蓄めたまま「ありがと



んで良いのかどうか迷ってしまっているように、ぼつが悪くてもじもじと手を伸ばしかねているように、二人は何度も心配顔をしている名付け親達と空の上の目には見えない両親とを交互に見遣りました。

見かねて真理子さんは、もう一度口を開きました。

「出発の時間が来たのよ。あなた達と、……わたし達の」

真理子さんの笑顔に励まされて、二人はそつと空に向かって手を差し出しました。それに応えるように、樅の小枝をさらさらと鳴らしながらそよ風のような優しい風が吹いてきました。

風は真理子さんと良夫君の間を吹き抜けると、降り積もったばかりの粉雪を巻き上げて二人の名付け子をその白いベールで包み込みました。お母さんに優しく抱き上げられるように二人の体が宙に浮かびました。怖ず怖ずとしていたその表情に笑顔が広がっていきま

す。二人は瞳を輝かせながら、地上の二人を振り返りました。

「ありがとう」  
少女はあどけない笑顔を浮かべて、良夫君に言いました。

「真理子さんを大切にね」

言ってから少女はいたずらっぽく笑いました。二人の体はぐんぐん舞い上がり、樅の梢を越えて小さくなっていきます。

「さようなら。あなた方にも神様の祝福がありますように……」



早口に少年が叫ぶのが聞こえましたけれど、その声はかき消すように小さくなっていつか空に吸い込まれてしまいました。

柔らかな布地を一面に広げたような雪野原を二人は歩いて行きました。とうに雪は止んで降るような星空です。真理子さんはそっと寄り添うように良夫君の腕を取りました。

「明日の今頃には、良夫君ちゃんのお嫁さんになっているのね」  
言つて真理子さんはくすぐつたように笑いました。

「何がおかしいのさ」

不思議そうに良夫君は真理子さんを見ました。

「だって、なんだか……」

途中まで言うと言つて真理子さんは顔をくしゃくしゃとさせて、口をつぐんでしまいました。涙が溢れて前が見えなくなつてしまった真理子さんは、良夫君に寄り掛かたまま立ち止まりました。

明日は真理子さんの誕生日。十九歳の真理子さんも大人の仲間入りです。そう、この国では二十歳を過ぎた男女は一人前の大人として、たとえ両親が許してくれなくても結婚することができるのです。明日、二人の若者は二人だけの結婚式を挙げたら、勇気を出してもう一度二人の両親に報告に戻るつもりなのでした。

「あつ、銀色の鐘の音がまた聞こえた気がした」

真理子さんは、樅の林を振り返りました。

「きつと、無事にお父さんとお母さんに逢えましたって、報せてくれているんだよ」

優しく頷き返しながら、良夫君は言いました。ふと見上げると目印の星はひときわ輝きを増したように見えました。やがて、二人はまた白い息を吐きながら歩き始めました。

「おさなご手に手に光りかかげて……」

歩きながら、良夫君は一緒によく歌ったシルバ・ベルズを口ずさみ始めました。真理子さんも笑いながらそれに合わせます。

「……神に明日を祈れば、

夜空の星たち輝き満ち、神の恵み深く

SilverBells、SilverBells、優しい鐘の音。

RingaRing、RingaRing、響きわたるよ……」

やがて——。二人の影は雪野原の中の点のようになって消えていきました。

そして誰もいなくなってしまった雪野原では二人を祝福するように、空の星々だけがいつまでも輝き続けておりました。

完